

2. 使徒ペテロとキリスト者の苦悩の問題

ペテロの手紙#2

<https://ichthys.com/Pet2.htm>

ロバート・D・ルギンビル博士著

復習： 第一ペテロの手紙は、靈的成長への呼びかけです。この第一の手紙の中で、ペテロは、個人的な苦難が靈的成長を妨げることに特別に注意を向けています。私たちの研究の大半は、苦難という課題に取り組むことです。

第一ペテロ 1:1-2 の改訂訳：

イエス・キリストの使徒であるペテロから、父なる神の予知により、聖靈の聖別を受け、イエス・キリストの血の注ぎかけのもとに服従するために、選ばれた人々、すなわちポントス、ガラテヤ、カッパドキア、アジア、ビテニヤの各地に散らされ追放された人たちへ。あなたがたに恵みと平和が増し加わるように！

個人的苦難の概要：しばしば「なぜ信者は苦しむのか？」と問われます。この問いは重要であり、今後の学びの中で詳しく取り上げることになるでしょう。とはいえ、最初から心に留めておくべきいくつかの要点があります。私たちがイエス・キリストを信じたとき、すぐに天へ移されるわけではありません。むしろ、私たちはこの地上に残されるのです。それは...

- 神の真実を学ぶため
- 私たちの信仰が試されるため
- 他の人々の信仰を養う助けとなるためです。

これら三つはいずれも靈的成長の要素です。(1) 神とその真実を学び、それを信じ、生活に適用することは、靈的成長の基礎です。(2) 試練は、神がご自身の真実を私たちに示され、それによって私たちの信仰を強めるための過程です。(3) 奉仕は靈的成長の自然な結果であり、私たち自身が成長したように、仲間の信者が靈的に前進できるように助けることです。

使徒ペテロ：ペテロの語源であるギリシヤ語のペトロス(*petros*「石」)は、ペテロの本来の名前ではありません。彼は最初シモンと呼ばれ、「聞く」という意味のヘブル語の名前(*Shimon* シモン)でした。族長シメオンがこの名を持つ最初の人物でした。神がレ

アの祈りを「聞いて」(創世記 29 章 33 節)、彼女に男の子を授けられたとき、彼女は神が恵み深くも応えて下さったことにちなんでその子にその名前をつけたのです。私たちの主は、「シモン」に初めてお会いした時、ペテロという名を与えられました(ヨハネ 1 章 35-42 節)。ヨハネの福音書によれば、ペテロの兄弟アンデレは、イエスと一日過ごした後、イエスがメシヤであると確信するのに十分な話を聞きました。アンデレはペテロをイエスのもとに連れて行った時、イエスは「**あなたはヨハネの子シモンである。あなたをケパ(訳せば、ペテロ)(アラム語で「石」)と呼ぶことにする**」と言われました。

ここで重要なのは、ペテロの行動には、この新しい名前を与えられるに値するような功績は何もないということです。他の人が彼を主のもとに連れて行き、彼が話す機会さえないうちに名前を変えられたのです。ペテロの名前を変えることで、主はペテロに、そして私たち、ペテロの人生はどんな善いわざにもよらないでただ信じるということによって、完全に変わることを告げておられたのです。ペテロについてそうであるように、主は私たちのことも(長所も短所も)すべて事前に知っておられます。主は私たちの人生の全行程を一目で見ることができます。私たちは、ひと時しか続かないこの世の日々の生活の細部に気を取られ、私達が間もなく永遠にわたって主と共になることを忘れがちです。私たちは、主がペテロに告げられた言葉とその意味を思い出すべきです： 私たちが見ていなくても、主は常に「全体像」を見ておられます。現世で得たものはすぐに塵となりますが、主から与えられる報いは永遠です(マタイ 6 章 19-21 節)。

小石と岩： ペテロに「石」という名を与えることによって、主はペテロの人生について正確に何を予言しておられるのでしょうか。ある一般的な見解は、イエスはペテロを教会の礎石とすることを意味していたという誤った主張です。それらの人達は通常、マタイ 16 章 13-20 節を使います。しかし、その箇所ではイエスはペテロに「あなたはペテロ(ギリシヤ語でペトロス、小さな小石や石)だが、わたしはこの岩(ギリシヤ語でペトラ、巨大な岩山)の上にわたしの教会を建てる」と言っているのです。さて、マタイ 16 章の文脈では、ペテロはイエスが「生ける神の子キリスト」であることを認めたばかりです。イエスはこのように、ペテロの発言の真理を強調しているのです。「この岩」と言われることによって、イエスは教会の礎石としての御自身を指しておられるのであって(聖典によく記されている教え： 特にイザヤ 28 章 16 節；第一ペテロ 2 章 6 節；エペソ 2 章 20 節参照)、ペテロを指しておられるではありません(他の聖句では支持されていない誤った考え方について：第一コリント 3 章 11 節参照)。こうしてイエスは、ヨハネ 2 章 19 節でご自身の体(ホトス *houtos*「この」神殿)の復活を預言されたのと同じように、岩と共に近接指示代名詞(「ホトス *houtos* この」)を用いて、ご自身のことを指しています：「この神殿をこわしたら、わたしは三日のうちに、それを起すであろう」(ヨハネ 6 章 50 節も参照)。

生きている石：とはいえ、マタイ 16 章 13-20 節は、ペテロの名前の意味を発見する道を指し示しています。イエスは教会(特定の教派ではなく、キリストを信じる普遍的な体)の本幹ですが、ペテロは全体の構造の中の一部(一つの石)です。ペテロは第一ペテロ 2 章 4-6 節でこの解釈を確認し、キリストがペテロ自身について宣言されたことは、すべての信者についても真実であると教えています。キリストは礎石であり、人に拒まれながらも神に選ばれた生ける石ですが、私たち信者も同様に「生ける石」であり、神に仕える霊的な神殿として建て上げられているのです。私たちは皆、キリストの教会の「石」なのです。ペテロは、華々しい成功と失敗を繰り返す傾向のある、非常に特別な人物でした。彼と他の使徒たちが、初代教会の設立において極めて重要な、「土台」となる役割を果たしたことも事実です。それこそが彼らが召された目的だからです(エペソ 2 章 20 節; 黙示録 21 章 14 節)。しかし、イエスがペテロに新しい名を与えられた目的は、彼の重要性を強調するためではありません。むしろその逆です。「ペテロ」という名は「神の家にある一つの石(レンガ)」を意味しています。つまり「ペテロ」という名は、パウロ(「小さい者」という名がそうであったように、その持ち主の真実な、神にかなった謙遜さを示す称号なのです。そして実際にペテロはやがてその名にふさわしい者となりました。使徒ペテロが主のために生涯で多くを成し遂げたことに疑いはありません。しかしここで強調されるべき点は、私たちもまた同じ真実な謙遜——すなわち、自分自身の力や知恵ではなく、主の力と知恵に依り頼むべきだという認識——を持つときにのみ、主は私たちをペテロと同じように十分に用いることができになる、ということです。(箴言 3 章 34 節; ヤコブ 4 章 6 節)。

ペテロの使徒職：使徒という言葉は、ギリシヤ語で「遣わされた者」を意味するアポストロス *apostolos* に由来します。今日、使徒という言葉は、ほとんど専ら「十二人」(ユダを除いたキリストの十一人の弟子とパウロ; エペソ 2 章 20 節; 黙示録 21 章 14 節)を指して使われていますが、初代教会では、この言葉は他の宣教師にも使われていました(ルカ 11 章 49 節; 使徒行伝 14 章 4 節; ローマ 16 章 7 節; エペソ 4 章 11 節)。ペテロは十二人の「キリストの使徒」の一人でした。これは特別な霊的賜物であり、それに伴って特別な条件、権威、責任が与えられていました。ペテロが手紙の冒頭でこの肩書きを名乗っているのは(パウロも同じようにしています)、その権威を示すためです。新約聖書を書けるのはキリストの使徒だけであり、場合によってはその使徒が親しい協力者に委託することもありました(たとえばマルコはペテロの権威のもとに、ルカはパウロの権威のもとに書きました)。ペテロは本当に謙遜な人物でしたが、自分の霊的な権威を示すことをためらうことはありませんでした。彼はその権威が神から与えられたものであることをよく理解していたからです。イエス・キリストの真の使徒たちは、いくつかの独自の特徴を共有していました：

- 使徒の人数は決して元の十二の数を超えることはなかった(マタイ 10 章 2 節～; ユダはパウロに取って代わられた、使徒行伝 9 章 1-19 節; 22 章 1-21 節, 26 章 12-18 節参照)。マッテヤについては後述。
- 彼らは自分たちを使徒と名乗った(第一ペテロ 1 章 1 節; 第二ペテロ 1 章 1 節; ローマ 1 章 1 節, 第一コリント 1 章 1 節)。
- 彼らは皆、その権威を裏付ける特別な奇跡的靈的賜物を持っていた(使徒 5 章 12-16 節; ヘブル 2 章 3-4 節)。
- 彼らは皆、特定の責任を担っていた(使徒行伝 9 章 15-16 節; ローマ 11 章 13 節; ガラテヤ 2 章 7 節)。
- 彼らは皆、イエス・キリストの復活の第一目撃者であった(使徒行伝 1 章 8 節, 1 章 22 節; 第一コリント 9 章 1 節)。

ペテロを使徒とすることによって、主はペテロに大きな責任を負わせられましたが、同時に、ペテロの人生の任務を遂行する権威と能力も与えられました。神は、私たちに与えられる神よりの能力によって成し遂げられる以上のことを、私たちに求めることはありません。

靈的成長のための備え：神がペテロの人生に備えられたご計画には、苦しみや迫害、そして最終的には殉教までも含まれていました。しかしペテロは、神が与えてくださった恵みの助けに支えられて、最後までその道を走り抜きました。そしてペテロ自身も、神が私たちに与えてくださった恵みの備えの一部となりました。救われるために福音(イエスに関するメッセージ)が必要であったように、今、私たちは靈的に成長するために真理(聖書に含まれる神の御言葉の原則)を必要としています。ペテロが、救い、成長、奉仕という神の呼びかけの三つすべてに応えた結果、私たちも、2000 年近く前にペテロが書いたこれらの手紙にある教えを学び、取り入れることによって成長する機会を得ているのです。

「使徒」マッテヤ：「13 人の弟子」という問題についてですが、確かにペテロたちはユダの代わりにマティアを「選出」しました。しかし(言うまでもありませんが)聖書に記されている人間の行為がすべて神によって定められたものとは限りません。ペテロ自身も何度も失敗しました(「私の足を洗わないでください」「では体全体を洗ってください」

など；参照、ガラテヤ2章11－21節）。神が聖書の中で使徒について言及される時、常に12人です（黙示録21章14節の十二の門、マタイ19章28節の十二の王座のように）。十二の門には誰の名前が刻まれるのでしょうか？ その中に「マッテヤ」という名前があるのでしょうか？では、誰が外されるのでしょうか？ この選挙はペンテコステ以前に行われましたが、その後ペテロたちは聖霊が来られたことにより、はるかに効果的に神に仕えるようになりました。マッテヤの「選出」は、旧約聖書のくじ引きの方法が用いられましたが、これはイエスが用いられたこともなく、新約聖書で認められたこともありません。ペテロは異邦人への福音伝道の時には神から啓示を受けましたが、「12番目を補充する」必要についての啓示は受けませんでした。一方、神ご自身が12番目を定められたときには、キリストはパウロに非常に劇的な形で現れ、誰の目にも明らかな神の召しを通して彼を選ばれました。マッテヤは信仰深い人物であったに違いありませんが、彼は「キリストの使徒」ではなく、人間の目に一時的にそう見なされたに過ぎません。さらに、ギリシャ語本文を見ると、ルカはこの選挙が理解できる行為であったにせよ、神によって認められたものではないことをほのめかしています。マッテヤについて「11人と共に数えられた」と訳される部分の動詞 シンカタプセーフィゾー synkatapsephizo (σ υ ν κ α τ α φ η φ ι ζ ω) は、もともと「反対票を投じる」「有罪とみなす」という意味があります。古代ギリシャ文学ではプルタルコス用例が唯一で、そこでは「ともに罪に定める」という意味で使われています。ここでは受動形になっているため、「一緒に退けられた／共に否定された」という否定的な意味を持つと解釈するのが自然です。したがってルカは、マッテヤの選出を積極的に肯定していないと理解できます。この言葉の正確な意味については、学者によっては疑問があるかもしれませんが、あらゆる言語学的慣例によれば、この言葉は否定的な意味合いを持つはずで、これは使徒行伝2章14節でも明らかで、ルカは「十二人」ではなく「十一人」と述べている。使徒を選んだのは人ではなくイエスであり、イエスは「聖霊によって」そうされたのです：

テオピロよ、わたしは先に[あなたのために]第一巻を著わして、イエスが行い、また教えはじめてから、お選びになった使徒たちに、聖霊によって命じたのち、天に上げられた日までのことを、ことごとくしるした。（使徒行伝1章1-2節）

しかし、主は仰せになった、「さあ、行きなさい。あの人（すなわち、**パウロ**）は、異邦人たち、王たち、またイスラエルの子らにも、わたしの名を伝える器として、わたしが選んだ者である。（使徒行伝9章15節）

